

【追悼寄稿】

藤掛和美先生の研究業績

椋山女学園大学教授

武山 隆 昭

はじめに

私が初めて藤掛先輩を知ったのは、昭和34年教養部2年生の後期であった。4期生は、週2日名古屋城三ノ丸域内の文学部で専門の授業が受けられることになっていた。先輩は4年生、名大準硬式野球部の選手で、運動神経抜群、その他どんなスポーツもすぐに上達する万能選手で、昼休みの草野球に私たちを入れてくださった。

卒業後私は、藤掛先生の勤務していらっしゃる愛知県立半田高等学校に赴任し、同じ学年を担当して持ち上がったので、ずいぶん多くのことを教えていただいた。教員の読書会の世話役をしていらっしゃるだったので仲間に加えていただき、藤掛先生がコミユ作『異邦人』のレポーターをなさったのを覚えている。翌年転勤してこられた榊原邦彦先輩と塚原清さんの四人で『枕草子総索引』を作ったのが、お互いに研究といえる活動を始めた最初であった。その後、恩師松村博司先生のお手伝いで高等学校の古文の教科書を編修したときには、もう職場が違っていたので四人の家を順に回って作業をしたことから、家族ぐるみのおつきあいになっていった。

藤掛先生の研究活動は、実に精力的で、レパートリーも広く、しかもそれぞれの分野において、まとまった著書を出しておられる。私の独断で、先生の研究分野を5つに分類整理して紹介することにする。まず、①卒業論文で採り上げた『薄雪物語』に始まる御伽草子・仮名草子の研究である。次は①から派生した、②説経節などの伝承文学研究。以上をまとめて「中世・近世初期文学」の分野と言えよう。これが先生のメイン・テーマである。そうして、③総索引の作成や語彙論といった国語学の分野、④国語科教育、特に

文章表現の指導法、これらをまとめて「国語学・国語教育」の分野と言うことができよう。さらには、③宮沢賢治の表現に関する論文など「表現学」の分野、と実に多彩である。

学風は、恩師松村先生の方法論を受け継いだ文献学に基づく正統派実証主義で手堅く、歴史社会学の視座からも考察を加えていく、という研究姿勢である。先生の文章は、論理的な展開の中に天性の文学的才能がちらっと顔を覗かせたしゃれた表現が散見するといった感じである。この天性の文学的才能は、いろいろな雑誌やパンフに載せていらっしやる「随筆」類や「詩」に遺憾なく発揮されている。

今回、本誌編集担当の杉本先生から、藤掛和美先生の追悼号に、先生の研究業績・著書の紹介を書いて欲しいという依頼を受けたので、先生から受けた数々の御厚誼へのささやかな返礼の意をこめて、先生の業績を前掲①から④までの分野ごとに、代表作一冊ずつを紹介させていただく。

その他の著書については、本誌に掲載の杉本・高木両先生編「藤掛和美教授略歴著述目録」を参照していただきたい。

1 『室町期物語の近世的展開—御伽草子・仮名草子論考—』

本書は、藤掛先生の主著とも言うべき地位にある。なぜなら、先生の卒論題目は「仮名草子序説」で『薄雪物語』を中心に論じたものであったが、その時以来の室町時代物語およびそれらの江戸時代前期における展開に関する論考の（昭和62年時点での）集大成だからである。

まず目次によって内容のあらましを紹介する。

序章 テクニカル・ターム「御伽草子」をめぐる

——「御伽草子」「中世小説」「室町時代物語」——

第一章 渋川版「御伽草子」の成立とその時代背景

一 御伽草子本の成立と寛文期

二 享保期における渋川版「御伽草子」の位置

第二章 御伽草子の表現から見た中世性と近世性

一 御伽草子の類型表現—御伽草子文体論のために—

- 二 謎言葉より見た渋川版御伽草子の複合性
 - 三 浄瑠璃物語の「大和言葉」
 - 第三章 御伽草子の造型・主題から見た中世性と近世性
 - 一 渋川版御伽草子「小敦盛」の位相
 - 二 「梵天国」諸ジャンルの位相
 - (一) 古浄瑠璃と説経との場合
 - (二) 渋川版御伽草子の場合
 - 三 渋川版御伽草子「浦島太郎」の主題
 - 四 渋川版御伽草子の中の子どもたち
 - 第四章 初期仮名草子における近世性と中世性
 - 一 整版本『恨の介』の表現技巧
 - 整版本改作のねらいをさぐる —
 - 二 『恨の介』と周辺作品との畳語
 - 三 薄雪物語の表現技巧—その人気を支えた言語遊技について—
- あとがき

本書の眼目は、これまで中世性の視野から論じられることの多かった御伽草子にたいして、「室町時代物語」から江戸時代になって大阪の書肆渋川清衛門が「御伽文庫」として23編をまとめた時期、さらに吉宗時代を経て田沼時代までの出版事情まで、約400年間を視野に収めて論考を加えたという点にある。

第一章では、まず23編の御伽草子の祖本は丹緑横本で寛文10年までには出揃っていたと推定する。各物語の末尾に、「(末)繁昌し」「栄華を極め」「めでたし」といった祝儀的表現を持つものが19編で、他の4編は仏の功德を説くありがたい末尾となっていることを指摘する。そして、それらの表現は、為政者側が「家」という制度を通じて幕藩体制を確立しようとし、町人(商人)階級の側も「家」の意識を強く持ち家を繁昌させようするようになった、寛文という時代を反映しているとする。

渋川版「御伽草子」は、享保期に復刻され箱に入れ嫁入り本として売り出

されたが、この時の御伽草子は吉宗の治世下においてその封建道徳思想教化の政策に迎合しながら、封建道徳の教科書（特に女子に対する）の役目を担っていくと説く。

また、寛文2年に京都白木屋が江戸に進出した頃から、資本主義経済の仕組みが徐々に強まる中で、本屋商人は利益を上げるための商品として「御伽草子」を出版することとなったと指摘する。

第二章では、御伽草子によく見られる常套的描写「類型表現」および「謎言葉」「大和言葉」を採り上げ、渋川版「御伽草子」の文体の特徴を、他のジャンルとの比較の中でその中世性と近世性において明確にしようとする。

「類型表現」は、A列挙表現、B類似表現、C言語遊技に分けることができ、「美人の形容」に特徴的に見られるという。渋川版「御伽草子」の23編から「容顔美麗・青黛のまゆ・婢媚たる髪」といった類型的表現を抜き出し、分類、整理して考察した結果、「これ等美人の形容を筆頭にした類型表現は、類型的、紋切り型という点によって、却って、お伽草子の享受者に共感を呼び、その大衆性を支えたのではないかと思われる」と結論づけられた。実は、この稿の元となった口頭発表（国語学懇話会月例会）を私も聞かせていただき、クラシック音楽の主題旋律が後で何度も出てくるのを快感として受け止めるのと同じ心理ではないかと述べて藤掛理論に賛意を表した記憶がある。

御伽草子に出てくる「謎言葉」を、四つに分類し詳述した後、室町時代になって、『後奈良院御撰何曾』等に示されるように言葉遊び的表現が盛んになりより複雑なものが競われるような状況下において、御伽草子の謎言葉は比較的単純な取置型（言い替え型）をとっていると指摘する。その理由は、恋の成就の場面のストーリーに力点をおいて、その場面を興味深く盛り上げようとする小道具に謎解きを使ったからだと説く。更に、『恨の介』『薄雪物語』など仮名草子に分類される周辺作品の謎言葉とを比較検討した結果、「和泉式部」「さいき」は江戸時代に入ってから成立した作品だと推定し、「貴族的世界を志向する群」と規定している。このことから、渋川版「御伽草子」は、「庶民的世界を志向する群」と規定された他の作品（「一寸法師」など）との両群が混在する、複合性に特徴があると結論している。

謎言葉の四分類の一つ「大和言葉」について、御伽草子と浄瑠璃物語とを比べ、恋の成就の際に用いられる謎言葉の校異を検討した結果、「大和言葉」の多用化が御伽草子から浄瑠璃物語の生成へという過程の一つの特徴的要素であると指摘している。

第三章では、渋川版御伽草子「小敦盛」と「梵天国」と「浦島太郎」とを各節で採り上げ、それぞれ平曲・謡曲・幸若舞・説経節・浄瑠璃等の周辺ジャンルを渉猟して、同一話材物語がジャンルによってそれぞれ造型・主題がどのように違うか（または類似しているか）を比較考察し、渋川版御伽草子の中世性と近世性とを明らかにしようとしている。

「小敦盛」は、平家物語「敦盛最期」に端を発し、謡曲「生田敦盛」、それを絵巻物化した草子を経て、御伽草子「小敦盛」が成立した。これは〈貴族域〉に属する。一方、幸若舞「敦盛」は〈武士域〉に、説経「こあつもり」と古浄瑠璃「こあつもり」は〈民衆域〉に属すると規定する。御伽草子「小敦盛」は、一の谷の敦盛熊谷の話を省略し、「さても、敦盛の北の御方は、…敦盛の討たれさせ給ひぬるときこしめし」で始まる。したがって、題名通り「敦盛の子」の話かと思わせる。事実、他のジャンルの「こあつもり」の主人公は「子敦盛」である。ところが、御伽草子本では「北の方」へと主人公が傾斜し、「敦盛北の方譚」（＝主題の転換）となっている。このことは、御伽草子の読者層を上層商人階級の子女と限定して、嫁入り本としての販路拡大を企図した本屋商人渋川清衛門の商魂によってなされたものである。一方、一夫にひたすら操を尽くす北の方は封建道德の鏡であり、道德教科書の役割をも担う御伽草子は、封建支配を確立せんとする幕府にとっても都合の良いベストセラーであった。

「梵天国」の場合は、語り本系統の古浄瑠璃正本「ほん天国」(A)と読み本系の御伽草子「梵天国」(B)との間に、根本的な筋の違いはない。主人公の玉若（のち中納言）の親孝行に感じた梵天王は、娘の姫君を玉若に参らせる。姫君の美しさを伝え聞いた帝は、姫君を入内させようと、中納言に難題を仕掛ける。叶わねば姫君を入内させよと要求される難物を、姫君は梵天国から次々と呼び寄せてしまう。しかし、最後に帝から要求されたのが「梵天王の、直

の御判」であった。これはまさに難物で姫君も取りに行くことが出来ない。さて、その後の展開が異なる。(A)では、ただ泣き伏す姫君に対して、熟慮の末守り本尊清水観音に祈誓をかけ「流馬」を賜りその馬に乗って梵天国に赴く強い男中納言がいる。対して(B)では、「ただ内裏へ参らせ給へ」と言っ帝の命に屈服しようとする軟弱な中納言に対し、姫君は夫に「愛宕山の奥にいる馬を連れてきて大豆三石三斗食わせた後……」と指図し遂に「馬は虚空へ上がりける」と梵天国に至り「直の御判」を手に入れさせる。事態の解決に敢然と立ち向かう姫君の賢女ぶりが描かれている。説経節も(A)とほぼ同じで、語り本系では強い中納言が描かれ「男の物語」であったのに対して、読み本系(B)では強い姫君弱い中納言像の「女の物語」であった。以上から、御伽草子が「女性のための教訓的物語」としての位相を持った嫁入り本であったという近世性が明らかになった。

以下詳しい内容紹介は割愛するが、「中世小説」とも「室町時代物語」とも呼ばれ、論者によって必ずしも定義付けがきちんとしていなかった「御伽草子」というテクニカル・タームに明快な定義を与え、近世という時代背景＝政治経済社会情勢の中で、「御伽草子」の変貌を、出版元の側、読者の側から捉え直して論じた本書は、既に学界で高い評価を得ている。

(昭和62年11月、和泉書院、四六判238頁)

2 『説経節の世界——千秋万ぜいのエレジー』

この書も、目次にそって全体の内容を紹介する。各章は、それぞれ3乃至7の小節に分かれているが、節の題目は省略した。章に付された「副題」は掲載した。

序章 説経節と漂泊民の運命

——あらいたはしや千秋万ぜいのエレジー

第一章 説経節における「道行文」の位相

——峠越え辿る細道驛道

第二章 説経節における「申し子」の位相

—命にかへ子種授け給へ

第三章 説経「まつら長者」の位相

—聖と賤と漂泊と

第四章 説経「さんせう太夫」の位相

—安寿悲しやいたはしや

第五章 説経「かるかや」の位相

—道心なにゆゑの出家遁世ぞや

第六章 説経節の擬声語・擬態語

—鰐口ちやうどうち鳴らし

終章 説経「あいごの若」の位相

—去るか細工逝くか愛護名残惜しや

あとがき

序章では、「説経節」の定義と成立・盛衰について論じている。説教が僧侶の説く仏の教えであるのに対して、説経は「説経浄瑠璃」とも呼ばれ、中世において諸国を遍歴しながら町の辻などで「安寿と厨子王の物語」などを節をつけて語り、渡世する漂泊民によって発展していった芸能である。ところが、近世に入って身分制度が確立する中で、定住を強いられ身分的下位者に位置づけられてしまい、宝暦のころまでに浮き世の隅に追いやられて消滅してしまうと説く。「説経節」隆興と衰微の課程を、キーワード「あらいたはしや」と「千秋万ぜい」とに象徴させて、分かりやすく論を展開している。

第一章では、「漂泊」と「道行文」に焦点がある。道行文というと近松浄瑠璃「曾根崎心中」エンディングの「此の夜のなごり、夜もなごり、死に行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜。……七つの時が六つ鳴りて残る一つが……」が有名だが、それに先立つ説経節における「道行文」の考察が本章である。軍記や仮名草子の道行き文では、歌枕や有名宿場が詠み込まれ、地名順の錯誤はほとんど無いのに対して、説経節の地名は漠然としていて地名順の錯誤もある。それは、多くの名も無き漂泊する人々によって語り継がれていくうちに、記憶違いや忘却によって変化していったからであろう。しか

し、説経節における「道行文」では、乙姫や照手らの献身の愛に支えられた、生への執念を希求する思いが満ちていた。やがて芝居小屋に定着した「道行」は、乙姫らが再生を希求して辿った時、暇も切り捨てられて、単に歌枕や地名の知識を示すものになってしまった。

第二章は、話型の一つ「申し子」譚についての論である。「申し子」とは、子室に恵まれない長者が神仏に「我が命にかへ子種授け給へ」と祈った結果、神仏の加護によって生まれた子をいう。『室町時代物語大成』所収の470本中70本が「申し子」譚である。『神道集』所収50話中には5話に、『説経正本集』所収66本中には26本に、それぞれ「申し子」譚が取り込まれている。

3種を比較考察した結果、比率的に見て説経正本が「申し子」譚を有する率が最も高く、内容的にみても「将来父母等が死ぬといった不幸予告がある」作品が6:1:5で説経正本の割合が高いことが分かった。説経節の「申し子」譚には、「貧に子あり、長者に子なし」に象徴される、子どもだけを宝として生きようとした貧者の思いが込められ、口承した人々の「賤性」との関わりが窺われる。そして、「命にかへ子種授け給へ」には、虐げられた己の生と引き替えに、生まれてくる己の分身に幸せへの回帰を切望する賤者の願いが奏でられている。

第三章からは、一つ一つの作品を採り上げて、ある話材が写本・説経節・浄瑠璃等へとジャンルを変えて展開する過程の中に説経節の位置づけを試みていく。本章では、写本『さよひめのさうし』、奈良絵本『つほさか』、古活字本『ちくふしまのほんし』などと題名・形態を異にする同様の筋立てを持った物語群として存在する「さよひめ物語」という話材の中から、現存最古の写本『さよひめのさうし』(=A)と説経正本『まつら長者』(=B)とを比較して、裕福な家に保存され娘たちの読み物であった写本から説経節への過程で、いかなる変化を遂げたかを見ることによって、説経『まつら長者』の位相を明らかにしようとする。

「去程に、あふみの国ちくぶ嶋、べん才天のゆらいをくわしく尋申に、大和国つほ坂といふ所に、まつら長者と申人にて、……」と語り始められるBは、冒頭部に本地語りを入れるが、Aは末尾部に本地が叙されるものの冒頭部に

はない。説経節の特徴として、藤掛先生が挙げられる三点は、①聖性（宗教性）、②賤性（社会性）、③漂泊性であるが、冒頭部は①の現れである。次に②は、父の菩提を弔う費用を捻出するためさよ姫が身を売るところで、ごんがの太夫が姫を買い取り奥州へ連れて行く場面での体罰・母娘の別れの描写に見られ、③は大和から奥州へ下る長い「道行文」に伝承者の実際の遍歴体験を読み取ることができる。

大蛇は、人柱に捧げられたさよ姫の誦える法華経によって大蛇の苦を逃れ、角鱗落ちて十七・八の上臈となり、お礼に如意宝珠の玉を姫に与える。元の上臈に回帰した「大蛇」は自らの素姓を姫に語る。自分は伊勢の国二見が浦の者であるが継母に憎まれこの地に売られ人柱にされた恨みで大蛇となって在所の者を取って服するようになったのだ、という。この、Aに語られていない「人身売買にあった賤者の素姓」は、説経本Bの「賤性」の位相をいっそう象徴的に示していると言える。

第四章は、森鷗外の小説『山椒大夫』で有名な安寿と厨子王の物語である。先生は、『統国語学論考及び資料』（和泉書院刊）所収の「さんせう太夫総索引」を作成する過程で気付いた、この作品の特徴的語彙から、説経「さんせう太夫」にも、①聖性、②賤性、③漂泊性という説経節の特徴が具わっていることを語彙論の面から立証しようとする。

すなわち、①聖性（宗教性）を示す語句としては、お聖24、お聖様11、聖10、法師2、僧2、国分寺10、寺8、誓文12、地藏菩薩15、地藏5、仏3、供養3などを挙げ、厨子王をかくまった国分寺のお聖を代表とする（数字は用例数、以下同じ）。

②賤性（社会性）を表す語句としては、（ア）売る20、買ふ13、人買ひ船2、人売り2、商ひ4、（イ）柴36、刈る30、鎌8、潮12、汲む14、柄杓5、皮籠15、（ウ）焼金11、責む6、責め殺す6、縦縄横縄4、水責め1、湯責め1、ごちやう29、（エ）土車2、引く18、育む18、いたはし33などを挙げる。特に「御説」29について、「階級社会にあつて、身分的下層民が、己を支配する上位者から受ける『絶対的に服従せねばならぬ掟』の意を含んでおり、説経『さんせう太夫』にあつては、貴人でない非道な悪徳長者山椒大夫の言葉を『御説』

とし、しかも多数表現されることから我々は、支配・被支配の社会構造に組み込まれた下層民と説経節との深い関係を把むことができるだろう。」と述べる。

③漂泊性を示す語句としては、宿23、お宿23、宿札3、旅4、旅人2、旅くたびれ1、杖6、草鞋2、連る9、連れ立つ4、上る13、戻る11、お戻り20、その他として丹後から都までの道行き文を挙げる。これらの語から、未だ定住を強いられなかった中世の漂泊遍歴する人々の行動に敷衍できる説経節の位相が窺える、と結論する。

第五章以下は長くなるので割愛するが、同様の手順で説経節の特質を考察している。

(平成5年4月発行、ぺりかん社、四六判236頁)

3 『枕草子総索引』(藤掛・榊原・武山・塚原共編)

大学は言うまでもなく、高校レベルの古典授業であっても、用例を示して古典単語の「語義」を説明することの有効性は論を待たない。適切な用例を捜すのに便利な、作品別の「語彙総索引」類は、現在でこそ中古・中世前期文学のほとんどに就いて刊行されていて、重宝しているのであるが、昭和40年の時点では、古事記・万葉集・源氏物語・徒然草の総索引はあったが、枕草子はまだなかった。そこで、我々4人で何とかしよう、ということになって、高校教諭としての仕事の合間を縫って、カード取りから始めた。カードを取る段階で、複合語・連語と認め一語とするか、切るかで議論したり、形容動詞連用形か副詞かでもめたり、文法の勉強になった。本文は、当時もともと定評のあった岩波の日本古典文学大系を用いることにした。ただし、本文使用の許可を岩波にもらうのに苦労し、松村先生のお力を借りた。枕草子の延べ語数は32,905語であるから、カードの枚数は「複合語の下位語」(例：ゆく→なりゆく)を示すカードを加え約4万枚になる。それらをアイウエオ順、頁・行順に並べ、原稿用紙に清書した。清書ができあがったら、逆引き(索引の語を本文中に捜し、あったら消す。「を」まで終えて全て消えていたらOK)を行い、必要箇所を訂正する。後は、初稿・再校、三校めでたく完

成となる。4人力を合わせても刊行までに2年7ヶ月を要した。今ならパソコンを使って1人でやっても1年たてば出来るだろう。藤掛先生にとっても他の3人にとっても公刊した最初の書であったので、完成祝いに越前海岸で一泊して蟹を思いっきり食べた。

先生はその後も、『古活字本狭衣物語総索引』、『御伽草子総索引』、『今鏡本文及び総索引』（すべて笠間書院刊）と次々総索引を手がけられる一方、高専のち中部大に職場が変わられたこともあって研究のための時間にも恵まれ、前述①②の著書を総索引と同時進行で執筆なさったのであった。

（昭和42年11月，右文書院，B5版316頁，松村博司監修）

4 『わたし』探しの文章表現』

本書は、先生の最後の単著書となった。先生の研究著作の系譜の中では、『国語授業論の新生』（和泉書院，平成元年刊）に続く国語科教育系列に位置づけられる。ただし、著者が「あとがき」で書いておられるように、最初は文章表現法の教科書として刊行するつもりで執筆したものを、廣橋社長の提案で若い読者を対象とした一般書として出版することになったのだそうである。そのため、「文章表現法の教科書」の面と、「自分のことを文章に書くことによって〈わたし〉を見つめ直し発見しよう」と提案する啓蒙書の面とを有している。私は、新しいタイプの「国語表現法」の教科書として紹介したい。

藤掛先生は、名古屋大学で平成9年度まで「国語科教育法」、本務の中部大学女子短期大学日本語日本文化学科（平成10年4月から人文学部に改組）で「文章表現法」「文芸創作入門」等を開設以来担当されている文章指導の達人である。著者自身の文才も相当なもので、レトリック（修辞学）に関する共著書もあり、詩作などなされる。指導者自身に文才があることは、何よりの強みで、著者の表現指導は大きな成果を上げておられ、作品例として掲載されている学生さんたちの文章もかなり質の高いものばかりである。

第一章は「なぜ人は書くのか」—表現の原点としての挽歌」と題して、万葉集の挽歌が現代の私たちの心を捉えるように、身近な人の死を悼む心こそ

「表現の原点」であると規定する。曰く、「挽歌」は、「向こう側」に逝ってしまった愛する者・親しき者から「やってくる言葉」だと言えましょう。その「やってきた言葉」は、「こちら側」に残されてしまった者の心に入り込んで、「鎮魂の言葉」へと浄化し、「向こう側」に逝ってしまった愛する者・親しき者のさまよえる「生魂」を鎮め、そして「こちら側」に残されて嘆き悲しむ魂をも鎮めるのです。

身近な人の死は不幸である。その不幸を「表現指導の絶好の機会」と提起するのは、一見非情にも思える。しかし著者は、追悼文（挽歌）を、それを書いた人の言葉と言うよりも「やってきた言葉」として捉えているのである。ここに藤掛先生の人間味が窺われる。本書の帯の推薦文に三浦朱門教授も「悲しみの浄化が文章や文学の出発点という思想は、实际的であり、かつ美しい。」と書いておられる。他に「別れ」「旅立ち」なども加わる。

第二章は「〈わたし〉を表現する—（わたし）探しの表現Ⅰ」で、思春期を迎え自我に目覚めつつある生徒や学生に、「詩」という表現形式で自己を吐露させることにより、「汝自身を知れ」の箴言のごとく、学生自身が自分の悩み・障害・挫折の実体を知り、それらを乗り越える方途を探らせるという試みである。また、散文の形で自分史を書かせる試みも紹介してある。それらの子どもたちの作品を通して、親や教師が子どもの内面を知るきっかけになることをも指摘している。

第三章は「〈わたし〉の「母」を表現する—（わたし）探しの表現Ⅱ」という設定で、毎年「母の日」の前に、母をテーマとする作文を書かせるという実践の積み重ねから、子どもの立場から母を見る目が、自分もやがて母になるのだという自覚に成長していく過程が様々な実例を基に論じられている。

第四章は「〈わたし〉を創作する—（わたし）探しの表現Ⅲ」で、短大卒業間近に、「十年後のわたし」を主人公にした創作（短編小説）を書かせた実践報告と、秀作の紹介である。

この本を読むと、何年か前に国語教育界で論争の対象となっていた、「学習作文か生活綴り方か」「作文技能か自由作文か」などといった問題が、高次元の世界で見事に解決されているように感じられる。それにしても、先生自身

がこんなに早く、「向こう側に逝ってしまった愛する者・親しき者」になってしまわれるとは。

(平成10年4月発行、和泉書院、四六判変形170頁)

5 もう一つの足跡

藤掛先生は、豊田高専在職中の昭和58年4月から、お亡くなりになる二日前の9月24日まで、毎週金曜日に椋山女学園大学文学部国文学科の非常勤講師として来講して下さった。先生の希望で、第2時限と第3時限に時間割を組んだのは、60分の昼休みに図書館を利用したいという理由からであった。「工業系の高専ではなかなか国文学の専門書は買ってもらえないので、椋山大学の図書館に自由に入出りできるのはとてもありがたい。」といつもおっしゃっていた。非常勤講師室で愛妻弁当を食べ図書館で調べ物をして、第3限の始まる15分前くらいになると、決まって私の研究室をノックなさる。二人でコーヒーを飲みながら、少しおしゃべりして、1時20分になると共に授業に出発、というのが金曜日の日課であった。

先生は、高専では一般教養としての「国語」の授業しか担当しないので、椋山で国文学専門の授業を担当できるのは嬉しい、と言ってはりきってご指導くださった。中部大短大日本文化学科主任教授に就任なさってからも、忙しさが増したとおっしゃりながら、椋大で授業するのは楽しいと言って休講もほとんど無しで来講して下さった。以下に、「椋山国文学」の各号彙報欄から、先生ご担当の講義題目を転載する。これは、もう一つの先生の足跡であると考えるからである。

昭和58年度	三年	講読	説経「小栗・照手の物語」
	二年	演習	お伽草子
昭和59年度	二年	演習	三河矢作浄瑠璃姫物語
	三年	演習	安寿・厨子王の物語
昭和60年度	三年	講読	死者の書
	二年	演習	説経「しんとく丸」の世界
昭和61年度	三年	講読	宇治山荘は狭き門

	二年	演習	艶書小説「薄雪物語」
昭和62年度	三年	講読	更級日記
	二年	演習	お伽草子とその時代
昭和63度	三年	講読	嫁入本の世界
	二年	演習	ふるさとの文芸
平成元年度	三年	講読	命にかへ子種授け給へ
	二年	演習	鶴女房と天人女房
平成2年度	三年	講読	峠越え 辿る細道暇道
	二年	演習	歌と人と旅と
平成3年度	三年	講読	源氏物語を歩く
	二年	演習	「浦島太郎」の遍歴
平成4年度	三年	講読	悲劇人の系譜
	二年	演習	小栗照手の物語
平成5年度	三年	講読	安寿悲しやいたはしや
	二年	演習	拒む女人と拒めぬ女人と
平成6年度	三年	講読	さよ姫物語
	二年	演習	姫君こそ末繁盛
平成7年度	三年	講読	ああ結婚（蜻蛉日記・源氏物語）
	二年	演習	お伽草子への誘い
平成8年度	三年	講読	説経「しんとく丸」を読む
	二年	演習	「小栗・照手の物語」を読む
平成9年度	三年	文学概論	「何故に文学を学ぶのか」
	同	上	（A組・B組計2コマ）
平成10年	三年	文学概論	「何故に文学を学ぶのか」
	三年	演習	安寿幻想
平成11年度	三年	文学概論	「何故に文学を学ぶのか」
	三年	演習	さよ姫幻想—説経「松浦長者」を読む—

（平成11年度10月以降は、村上学先生にご担当いただいた。）

藤掛先生が、いつ頃何に興味を持って研究の対象にしておられたかがある程度わかる。「全国小栗サミット」の重鎮であらせられた先生は、やはり小栗判官がお好きであったようで、17年間で3回採り上げていらしゃる。同じ作品を採り上げて、そのつど追求の角度を変えたりして、深めて行かれた。それは、毎年度初め学生に配布する「授業科目一覧」掲載のシラバスを見れば瞭然である。また、熊野古道や湯ノ峰温泉の話をして下さったのも、今となっては懐かしい思い出である。学生を青墓（大垣市）へ連れて行って下さったこともあった。「をぐり論」を一冊にまとめる計画をお持ちだったようで、果たさずに逝かれたのは残念。「安寿・厨子王」も3回である。たしか5年ほど前の夏休みに、新潟県の直江津・柏崎の方まで安寿の母の伝承遺跡を訪ねて行って来たと言った記憶がある。京都にも、夕霧や夕顔の墓がありませんからねと言って二人で盛り上がった。

文学才能豊かな先生は、講義題目の名称にもこだわりが感じられる。「源氏物語」〈椎本〉〈総角〉を採り上げ、薫の求婚を拒み続ける宇治の大君をアンドレ・ジイド『狭き門』のアリサと比べることをねらいとした演習の題目は「宇治山荘は狭き門」という凝ったものであった。

中部大学でもそうであったように、相山女学園大学でも先生の講義は学生に大変人気があった。

おわりに

⑤の表現学関係の業績に触れるべきなのであるが、私自身が表現学に疎いので、先生のご逝去後発刊された『表現学論集』（平成12年5月、表現学会ナゴヤ例会）にご遺稿「『文章表現』の行方—映像メディア時代における文学の存在意義—」が掲載されたことだけを紹介しておく。

私が最後にお目にかかった平成11年9月24日の会話では、お互い夏休みに書いた原稿のことが話題だった。その時伺った、勉強出版が企画している『御伽草子事典』の中の「御伽草子の分類」の項目を依頼され、夏休み中に書いたが、原稿用紙二十枚というところ三十枚になってしまっただけを削ろうか困っているというお話の事典は、まだ刊行されていない。「論文なら自分の

考えを主張すればいいのだが、事典の場合は主な学説を網羅しなければいけないし、かと言ってただ諸説を並べただけではしょうがないので、自分なりに妥当と思う分類を提起したのだが……」などと話された、あのにこやかなお顔と明るいお声が私の脳裏に鮮やかに蘇って来たのもうこれ以上書くことができなくなった。

改めて、藤掛和美先生のご冥福をお祈りして筆を擱く。

（平成12年10月15日稿）